ピエール・ベールである。古典の休戰が破れ、傳統的信仰への鬪爭が初まる。

〔第二部〕之の傳統的信仰への宣戰は「理性」を掲げる人々によつて行はれた。彗星に就いて、託宣に對して、魔法使に關する迷信へ、の攻擊から、奇蹟の否定が、啓蒙への努力が爲された。リシャール・シモンとその聖書批判はボシュエを中心に囂々たる論戰を惹起した。ライプニッツの新舊兩教の統一計劃は失敗はしたが、理性主義者達は破壞から建設への事業に從つてゐた。

〔第三部〕ジョン・ロックの經驗論が此の再建の礎石となつた。デイスム及自然宗教の成立はその自然法思想と密接に結びつく。そして自然法概念こそ新らしき哲人達が、古き神への義務に代つて主張する人間の權利なのであつた。グロティウス、スピノザ、プッフェエンドルフ、カンバランド、フェヌロン等々の手によつて、更にナント勅命の廢止と英國の革命はこの自然權の强化に貢獻した。宗教と分離した道德は地上の幸福を追求する。科學とその進歩とがその道をさし示してゐる、斯くして新らしき型の人間性、貴族でなくして市民的な型が構成される。

〔第四部〕そのポエジイのない、散文の時期にも、生活の美化、人間の感傷性(センシビリテ)は胚胎してゐる。オペラが榮え、笑が氾濫する。同時に國民的な、民衆的な、本能的なものが、換言すればロマンテイクへの潮流が窺はれる。

我々は斯くて歐洲意識の危機を克服して來た。しかし、アザール教授の論述には尙可成りの危機を內在せしめてゐるやうに思はれる。古典時代の恒靜が單なる旅行者の見聞によつて動搖を來すものであらうか。過去への信賴の喪失のみで歷史への懷疑が生じるのであらうか。知的優越の移動は新舊兩教以外の原因に求むべきではないだらうか。等々。そして教授の危機の中核は確に、その對象とせる時期の歷史的意義の把握の弱小性に存する。もし文學史家たる教授にして、この點がより鮮明にされるならば、明知を以つて書かれ、豐富な、興味ある內容を有する八〇〇頁餘の大著は、この未開の時期の研究者に、より一層の光を與へる一大標識となるであらう。〔前川〕

彙報

○史學研究會

例會 十月三日(土)午後一時半より文學部陳列館第一教室に於いて左の講演あり、閉會四時半頃。

一、北魏に於ける尙書の地位並に組織 內田吟風氏

北魏は皇始年間既に尙書を設け、政治機構の中樞としたが、夫は未だ部落制を多分に殘存してゐた北魏內の北族に甚だ不利で、遂に一時廢止された。然し九品中正制と吏部中心の官僚組織を好都合とする漢人門閥の力は北魏朝廷を動かし結局尙書省を復活せしめ、而も其機要・行政的地位は魏晉及南朝に比して遙に重要であつた。其組織に關しては魏書官氏志其他にも明記する處がない

が、斷片的記事を綜合して大體を把握し得、長官たる尙書令は明かに宰輔の任に當り、又尙書諸曹の所屬・組織・及び夫が直接庶政を掌どらざるも九寺・地方官廳を監督指示し、行政の中樞であつた事等を明かに知る事が出來る。

一、武家法の構造

藤　直幹氏

法は社會に卽してあり、人々の社會生活、社會關係の表現である性格により、その考察の立場を二大別し得る。(一)法の規定內容、(二)法の形相を問題とするものである。前者が特定社會における秩序を取扱ふに對し、後者はその法としてある形態の考察であり、此處には專ら後者の立場よりするのである。斯かる文化の存在形態に關する考察は悉ゆるものに適用さるべきであるが特に法が社會生活の端的なる表現として顯著なるものがあり、特に武家法において、社會統制の必要上、社會固有の慣習に基き自家社會にのみ適用すべきを意圖した事により斯かる考察上興味ある問題を含む。武家法の形態的特徵として、(一)非體系的なること、卽ち武家社會秩序維持のため悉ゆる考慮を廻らせる事が無い。例へば統治機關につき何等規定せない、此事は武家の主從關係が私的、全人格的であり、從つて支配關係が明らかにするを要せぬ事情に基くであらう。社會生活に於ける私的關係の優越は個々への干涉となるが、その結果、法がより具體的である事が認められる。例が法性が附與されてゐるのも、法が具體性において考へられてゐる事を示す。斯く一事例が一般的妥當性を有つことは、成員各自の一律性――封建社會における個々の類型性に基く。更に斯く例を法とし、法の中に含まるゝ道理を抽象する事がない。從つてその適用に際し一條文よりする推理がない。この事が法の夥しい發布にも拘らず法的生活の向上を來さなかつたこと、法學の成立が齎さなかつた一因でもあらう。云々

六會　十一月二十一、二兩日に亙つて昭和十一年度、本會大會を開催。

第一日は午後一時より京都帝國大學樂友會館講演室に公開講演會を開き、左の三氏の講演あり、來會者多數、盛會にして、その間恒例により評議員選擧を行ふ、その結果石橋評議員に代りて梅原末治氏評議員に當選、他は全部留任となる、會務報告後講演會を閉ぢ、引續き同所に於て晩餐會、懇話會を催す、出席者約三十名、午後十時閉會。

一、近世文化と空人

栗田元次氏

（本誌掲載の豫定に付き梗概を省略）

一、黼黻文考（幻燈使用）

原田淑人氏

「黼黻といふのはぬいとり模樣で後漢明帝永平三年に定められた祭禮十二章の最後の二つである。十二章全部に就いて述べる時間がないから、黼黻に就いて述べて十二章を代表させるつもりである。十二章の制度は書經に『日月星辰山龍華蟲作會宗彝藻火粉米黼黻云々』とあるのに基いたものであるが、この書經の文章の讀み方には孔安國・馬融以下種々の異說があり、鄭玄は宗彝が十二章の一に數へ、又その順序をかへてゐる。宗彝といふのは宗廟の彝器の謂である。鄭玄は虎と雉とで之を表すといふ樣に考へてゐる

が、これは十二章の中に數へるべきではないのである。漢より三國を經て六朝の宋齊まで鄭玄の說の樣な十二章はなかつたが、南朝の梁になると鄭玄の說が用ゐられ始め、隋唐になるとます〳〵盛んとなり、我が國にまで行はれた。」と十二章に關する諸說殊に鄭玄說を詳述し、更に鄭玄說の來由に就ても考察を加へた。次で十二章の文樣の說明をなして愈々本題の黼黻文に入り、「黼黻に對する孔安國の註に、『若斧形』『若兩巳相背』といふ。後世は黼は斧の模樣、黻は亞の形となつてゐる。唐宋明淸皆然り。之に道德的な解釋をつけて斧は決斷の意、黻は君臣離合の意としてゐるが、本來の形はこんなのではなかつた。黼黻は周代からあり、古典には習見するのであるから漢以前に於て何かに見える筈であるのに、しかしかういふ模樣は何にも見えぬ。十二章中藻火米粉は皆幾何學文樣であるのにこれだけが寫實的なものであらはれてゐるのはおかしいことである。この模樣は天子の黼巾、黼扆、黼裳、黼冕に用ゐられる。又葬式の時に用ゐられその著しきは棺の上を覆ふきれ(黼荒)に見えるのであるが、漢あたりの黼黻模樣に實際に見た孔安國が『如斧形』『若兩巳相背』といつてゐるのは注意すべきで、黼は實際に斧の形でなく三角模樣卽ちぢぐざぐ模樣であり、黻は一種の雷文であつたらうと思ふ」と說明し、幻燈によつて、漢の畫像石の人物の着物のすそに見える模樣や、古錦の類、河南輝縣から出た木棺、河北縣出土の燕の瓦、戰國式銅器にあらはれた模樣を示し、これが黼黻文本來の形であつたらうと說かれた。

一、英國側より見たフランス總裁政府のアイルランド侵入

時野谷常三郎氏

(本誌揭載の豫定につき梗概を省略)

第二日 二十二日は午前九時より、東寺に殿堂、佛像、並に觀智院寶物館にて、東寺、觀智院、寶菩提院、大通寺等の名寶數十點を見學。來觀者多數にのぼり、本會は東寺見學記念繪葉書その他を贈呈した。尙當日特に展覽せられしもの〻目錄左の如くである。

一、嵯峨天皇御影　一幀
一、後宇多天皇宸筆御日記(國寶)　一卷
一、後宇多天皇宸筆東寺興隆條々御事書(國寶)　一卷
一、後宇多天皇宸筆庄園敎地御施入狀(國寶)　一卷
一、後醍醐天皇宸筆舍利奉請誡文(國寶)　一卷
一、後醍醐天皇宸筆御消息(國寶)　一卷
一、後光嚴天皇宸筆舍利奉請文(國寶)　一卷
一、弘法大師像(國寶)　一幅
一、十二天像(國寶)ノ中　六幅
　伊舍那天、羅刹天、焰魔天
　火天、地天、日天
一、五大尊像(國寶)　五幅
一、八字文殊菩薩及八大童子善財童子像(國寶)　一幅
一、弘法大師行狀繪詞(國寶)　六卷

一、百合文書　七通　一卷
一、太政官符　十二通　一卷
一、太政官符（長者官符）　二通　一卷
一、太政官符（別當官符）　七通　一卷
一、太政官符（定額官符）　一卷
一、民部省符　一幅
一、民部省符　一卷
一、尾張國牒　一幅
一、大和國符　一卷
一、北條時宗奉鎌倉幕府御教書　一通
一、文保元年院廳下文　一通
一、北畠親房佛舍利奉請狀　一卷
一、後七日御修法請僧交名並裏書續紙　一卷
一、足利尊氏御判御教書　二幅
一、足利直義卿判御教書　一幅
一、豐臣秀吉朱印狀　以上東寺藏
一、後宇多天皇宸翰七言律詩　一幅
一、慈覺大師入唐求法巡禮行記（國寶）　四冊
一、悉曇藏　卷三、八（國寶）　二卷
一、三寶繪詞（國寶）　三冊
一、東寶記（國寶）　十五卷　一冊附

一、蒙　求（國寶）　一卷
一、文　選（國寶）　一卷
一、古文尚書（國寶）　一卷
一、古文孝經（國寶）　一卷
一、類聚三代格（國寶）　一卷
一、作文大躰（國寶）　一卷
一、世俗諺文上（國寶）　一卷
一、韻鏡祕訣　一卷　以上觀智院藏
一、弘法大師御影　一幅
一、大元帥明王像　一卷　以上寶菩提院藏
一、前上座傳燈大法師位牒　一幅
一、三寶院勝覺啓文　一卷
一、遍智院成覺記文　一幅
一、空海書狀　一幅
一、醍醐關係文書　二卷
一、本覺禪尼記錄　一卷
一、本覺禪尼自筆置文　一卷
一、阿佛尼消息　一幅
一、平調盤板　一枚
一、十二律管　二箇　以上大通寺藏

終りに右見學を本會の爲めに快諾せられ特別の便宜を與へられた東寺本山、並に親智院、寶菩提院、大通寺當局に對し深厚の謝意を表する次第である。

○東洋史談話會

第一回大會 十一月二十三日(新嘗祭日)午後一時より陳列館第一教室に於て開催、全國各地よりも多數參會者あり、聽衆約百二十、極めて盛會であつた。講演は時間の都合上、多數申込者中次の十一氏の發表があつた。

開會の辭　那波助教授

一、元の錄事司に就いて　愛宕松男氏
一、金熙宗朝に於ける蒙古討伐の事實　外山軍治氏
一、寧古塔貝勒に就いて　戸田茂喜氏
一、鐵利靺鞨の住地に就いて　小川裕人氏
一、史記漢書貨殖傳に就いて　藤田至善氏
一、最近の水經注研究　森　鹿三氏
一、甲骨學の新展開　小川茂樹氏
一、禹傳說に見える狩獵文化的要素と農耕文化的要素　三品彰英氏
一、六朝造像供養について　水野清一氏
一、敦煌本唐律に就いて　內藤乾吉氏
一、度及び度牒制に就いて　高雄義堅氏
閉會の辭　羽田敎授

尙、講演終了直後、七時より四條橋畔矢尾政に於て懇親晩餐會を開き、出席者三十七名、テーブルスピーチ、雜談等に賑つた。

第五十二回例會 十月九日(金)午後七時、學生集會所に開催、出席者十八名、左の講演があつた。

一、八旗編成に就いて　塚本主稅氏
一、清太宗實錄に就いて　今西春秋氏

第五十三回例會 十一月十二日(木)午後七時、於樂友會館第一號室、出席者十六名。

一、王韶の開湟策　佐伯富氏
一、滿珠國成立過程の一考察　三田村泰助氏

○文那學會

例會 十月二十四日(土) 文學部第一演習室。

一、北平生活閒談　岩田兵三氏
一、山東旅行談　小川茂樹氏

三十周年大會 十一月二十一日(土) 午後一時より文學部第七教室に於て開催。

一、鄭注孝經に就いて　林　秀一氏
一、羅越國に就いて　杉本直治郎氏
一、題畫文學の發展　青木正兒氏
一、挨　拶　狩野直喜氏
尙、二十一、二、三の三日間、本學附屬圖書館に寄託せられて

ある近衛文庫中の漢籍展觀を行ひ、同展觀目錄並に支那學會三十周年記念册を配布し、參會者多數に上り盛會であつた。

○東方文化學院京都研究所

開所八周年記念展觀並講演　十一月七日、例年通り所内を開放し、一般の縱覽に供し、本年は特に西域出土繪畫の模寫・尙書の展覽が行はれ、午後は同所講堂室に於て次の講演があつた。

禮記月令の天象　能田忠亮氏

支那側露西亞側史料より見たる淸季外交史上の二三の事實について　矢野仁一氏

○西洋史讀書會

例會　昭和十一年度第三回例會は十月九日午後六時より樂友會館第五號室にて開催、左記二君の讀書紹介及び研究發表ありて九時前散會。出席者は、時野谷教授、井上講師をはじめ十七名。

一、Guizot; L'histoire de la civilisation en Europe et en France.　二回生　草場典夫君

一、トマス・モーア、英國の文藝復興について　二回生　島田武雄君

大會　第四回西洋史讀書會大會は、昨年度大會と同樣文學部聯合大會の一部として、十一月廿三日午後一時より、文學部第一教室に於いて岡嶋誠太郎氏司會の下にその公開講演會を開催。本年は、九州より長壽吉先生、仙臺より大類伸先生並びに高里良恭氏、東京より杉勇氏、岡山より山脇重雄氏の御出席があつたのをはじめとして、遠隔の各地からの來會者甚だ多く、本大會の年々隆盛に赴く姿を如實に示すものがあつた。講演會は、先づ時野谷先生の開會の辭に始まり、御講演をお願ひした各氏は左記の演題のもとに日頃御研鑽の一端を發表せられた。尙、九州大學の長先生が本大會のために御多忙中の貴重な時間を割いて特に一場の御講演を御快諾下さつたことは、吾々の豫期しなかつたことだけに、一層大きな喜びであつた。

一、開會の辭　文學博士　時野谷當三郎先生

一、十九世紀前半期の英國民衆運動に於ける復古的精神　文學士　花村文雄氏

一、テュルゴーの世界史論　文學士　前川貞次郎氏

一、Thomas Hobbes 著 Leviathan の政治思想史的意義　文學士　江坂長四郎氏

（特別講演）

一、一八六一年の英佛通商條約の意義について　文學博士　長壽吉先生

一、ドイツ勃興期に於ける國家觀念（Staatsidee）の發展　文學士　植杉英之助氏

一、ヘンリー八世の教會改革の背景とその意義　文學士　辻村正吾氏

一、捨兒の意味　文學博士　原隨園先生

一、閉會の辭　文學博士　時野谷當三郎先生

午後五時半、原先生の御講演を最後に、時野谷先生の閉會の辭を以て講演會を終り、續いて六時より四條萬養軒に席を移して晩餐會及び懇話會を開く。こゝにも、大類先生、高里氏、杉氏の御出席を得、午後九時頃盡きせぬ歡を殘して散會、こゝに本年度の大會を終つた。

○第四回地理學談話會大會

十一月二十三日午前九時より史學科第一教室に於て開かれた。聽衆堂に滿ち盛會であつた。當日の講演要旨は左の如くである。

神尾明正氏「廣島附近の動いた石器時代貝塚に就いて」は廣島附近に於ける貝塚を地質考古學的に考察してその原位置より移動せるものなるべきを論じ、野間三郎氏「フムボルト―アメリカ旅行以前―」は近世地理學の祖フムボルトが一躍名を成したアメリカ旅行以前に於ける彼の修學振りを紹介し、山口平四郎氏「九州諸港と對滿貿易」は門司、若松、福岡、長崎、三池、鹿兒島等の九州諸港が對滿貿易に占むる位置を檢討し、門司港の優越性を經濟地理的に考究し、織田武雄氏「人口地圖に就いて」は人口密度圖作製の諸方法の得失を考察せる後、本邦人口密度圖としては五十萬分一位の大さの寫圖に町村別の密度圖を作り、更に之を三分の一位に寫眞により縮圖してゼネラリゼーションを行ふが最も適當ならんと結論し、米倉二郎氏「福州と琉球館」は南支那都市の一類型としての福州の市城發達を考察すると共に、琉球館の設置された顚末をのべ、島之矢氏「家屋の構造に及ぼす雪の影響」は雪國に於ける特殊の家屋構造殊に屋根の對雪設備として石を置くもの、木を横へるもの、特殊の瓦、又雁木等をあげ、瀧本貞一氏「古事記に現れたる地理的名辭」は古事記のみなとは河口を意味する事を例證し、小牧實繁氏「久美濱灣沿岸の古地理」は久美濱灣に目下流入してゐる川が嘗ては箱石附近に河口を有せしならん事を地形や遺跡より考證し、砂丘の發達によるその變遷をのべ、藤田元春氏「金島銀島及びゴーレス地名の源流」は西洋の地圖に金島銀島が日本近海に最近まで畫かれた理由を明かにし、ゴーレスなる地名は薩摩の顯娃の郡より起つたものであると結論し、田中秀作氏「江濃間の舊交通路と聚落の變遷」は出作の行はれる場所が古き交通路の通つてゐた所に多い事よりヒントを得て、江濃山地殊に美濃側揖斐川本支流沿岸坂内村に於ける諸聚落の變遷を論じその起源は何れも新しく大低七十年乃至二百年位の歴史を有するに過ぎない事を明にした。中野竹四郎氏「上海港の今昔」は上海は太古蘇州河に沿ふ滬即ち漁村より起つて、遂に今日の大をなすに至る變遷をその地理的位置より考究した。〔米倉〕

○考古學教室年暦

昭和十一年に於ける考古學教室の概況を記載す。昨昭和十年末に來朝せる新嘉坡の考古學者カーレンフェルス氏は年頭にあたつて來學あり、東南アジア並に裏南洋方面に於ける同氏發掘にかゝる舊新石器時代石器類若干の寄贈あり、之に對して、本教室より本邦出土石器類を贈る。

一月末より教室員一同は本邦古墳中代表的なるものゝ立體模型の製作に從事す。初夏の交までこの製作を繼續し、前方後圓墳、圓墳、方形墳等、時代の前後を合して十點餘完成す。

新學年はじまつて初めて、四月中旬、濱田教授は、小林助手、角田學生、三森定男氏を隨へて香川縣三豐郡仁尾町小蔦島發掘を行ひ、楕圓捺土形紋土器の如き本邦繩文土器上の珍例を發見す。

六月下旬、考古學實習室に於て、數年來中絶せる考古學談話會開催、小蔦島發掘略報告、梅原助教授の支那歸朝談、水野長廣兩氏の支那蘇堂山佛洞略報の如き談話あり、會するもの二十數人。

七月下旬並に八月末と二回にわたつて滋賀縣蒲生郡安土村の甕棺山古墳發掘を梅原助教授、小林助手等によつて滋賀縣社寺課史蹟調査會の名によつて行ふ。

九月市內北野神社西方の紅梅町の寺趾(?)發見の爲梅原助教授等調査。

十月初旬、濱田教授、梅原助教授等渡鮮、滿洲國輯安縣高句麗古墳再視察を行ひ、又平壤附近に於いて發掘中の高句麗古墳等を視察す。

十二月中旬、考古學談話會第一回大會を開催。(詳報次號)

本年度に於ても、水野氏の手により、昨年發掘にかゝ滿洲國赤峯の遺物の調査整理を考古學實習室に於て行はれつゝあり。又、古文化研究會の事業たる本邦古墳調査は、本年度は本教室の梅原助教授及び小林助手によつて主として行はれつゝあり。本年度學士院賞受賞者たる末永氏の手により石舞臺古墳も本年はその整理中。

尙、本年度に於ける教授其他教室關係者の手になる出版物、左の如し。

梅原助教授「漢以前の古鏡に就て」　東方文化學院刊
同　「戰國式銅器の研究」　同
濱田教授　「樂浪彩筐冢遺物聚英」　平壤博物館刊
梅原助教授

〔以上中村〕

○讀史會

例會　十一月五日午後六時半より、樂友會館小食堂に開かれ、出席者西田教授、中村助教授、出雲路、藤、柴田各講師以下三十餘名、十時閉會す。

一、足利末期の商業資本　深谷芳太郎君
一、安藤昌益に就いて　奈良本辰也君
一、莊園研究の動同　磯津正志君

大會　昨年と同じく、文學部各科綜合研究發表大會の一として十一月二十三日、午後一時より日佛學館講堂に於て開催され、地方各地より參會せられた四十名の會員卒業生以下、多數一般聽衆出席の下に、西田教授の開會の辭があつて、左の如き諸君の研究發表があつた。尙、午後六時閉會後、本部地下室食堂に於て簡單な茶話會が開かれた。

一、開會の辭
一、山鹿素行傳　內藤晃君
一、田堵に就いて　田井啓吾君

一、水戸學の研究に就いて　時野谷　勝君
一、松平容保　日置爾三郎君
一、近世封建制度成立と都市住民　小川　勝君
一、無足人に就いて　寺尾宏二君
一、近世歌舞伎劇と神道との交渉　田中勝雄君
一、ぬ　る　い　西堀一三君
一、龍鬚筵に就いて　出雲路通次郎君
一、家領の傳領に就いて　中村直勝君
一、閉會の辭　武藤誠君

○民俗學會記事

例會　五月十九日、樂友會館に於て、鄉土生活研究所々員大間知篤三氏を迎へて例會を開く。

一、家族組織、特に隱居と婚姻に就いて　大間知篤三氏

鹿兒島縣甑島に於ける採集を中心として隱居、婚姻の古き姿を考究された。

例會　六月十八日、樂友會館に於て、東大助教授宇野圓空先生、本學開講を機會に例會を開く。

一、最近民族學界の動向、特にヨーロッパを中心として　宇野博士

ドイツではナチス統制下に愈々民族の個性的認識に力を入れ、シュミットの文化圏說は此の理解を容易ならしめると同時に、研究は線的なものに向ひつゝある。英、佛、兩國は民族學、民俗學の範圍の限定に腐心し「機械文明（メカニカル・シヴィライゼーション）に達しない非文明（ノン・シヴィライゼーション）に落着きさうである。米國は形態的把握から內容的把握に歸納的に認識せんとしてゐる。

カッペンスの如く考古學的資料の活用も注目されると論述される。

一、鞍馬竹伐り會に就いて　井上頼壽氏

見學豫備知識として說明された。

例會　十一月二十五日、會員のみの座談會を百萬遍カギヤで行ひ、各自の採集旅行談、珍資料の交換等に談笑す。此の間鞍馬竹伐會式、祇園會、牛祭等の見學を爲す。

○神祇並神道史に關する資料展觀の概要

當學文學部國史研究室にては、兼ねて神祇並神道史關係の資料展觀のことを企てゐたが、恰も今年度の文學部各科聯合大會を機とし、十一月二十一、二十二、二十三の三日間陳列館階上に於いて漸くこれが開催を見ることが出來た。神祇神道史の資料と云つては甚だ廣汎に亙るので、今回はその種目を神號並神影、神典並注解書及び神道史料とし、而してその蒐集地域は近畿を中心に、東は愛知、三重、西は兵庫、北は福井、南は和歌山に限り、社寺文庫、圖書館等を主とし、個人藏のものを加へ、たゞ宮內省圖書寮と東京に於ける一二特殊關係あるものをも含めて、其の出陳者數七十有餘に上り、點數略四百五十許になつた。今、その展觀の概要を略叙しよう。

第一部　御神號並御神影。神號に、八幡春日兩神號では惟足筆

のもの、又尊氏の書いた八幡大菩薩號の外、天滿大自在天神には因果居士筆、豐國明神には豐國神社所藏秀頼八歳書などが見え、なほ別雷皇太神や吉田大明神など土地の特色を表はした。兼敬筆の天神地祇や兼凞筆の木瓜大明神も珍らしい。

神影には、先づ奈良藥師寺鎭守八幡宮柱間障子板繪の神像が人目を引いた。こは、大神明神や龍田明神などの像を裴裴束姿の大和繪で藤原時代に描かれたのを、更に鎌倉時代に堯儼が書き改めたといふ。國寶である。又、住吉明神像(宮地博士藏)は撞木杖ついて白髮老翁の姿、室町時代の作。菅神像には、通例の束帶姿(中村直勝氏藏)の外、侍豎をあしらつたもの(柏村秋雄氏藏)など稀に見る逸品。殊に數多い渡唐天神像には五山僧の題賛があつて(守屋孝藏氏其他出品)、室町時代の天神信仰を如實に物語る。雨寶童子、春日赤童子、僧形八幡像並に開祖紀氏像も見られ得た。異色あるものに阿倍王子神社所藏安倍晴明神像の大幅がある。それと宮內省圖書寮から出された小形の晴明像と比見され、共に松明を捧げ持つ侍者が跪つてゐるのも面白い。垂迹神の本地佛を繪畫に表現した諸種曼荼羅類は、茲に集められた丈でも國寶の湯泉神社所藏熊野曼荼羅をはじめ、大峰、高野四社明神、山王、多賀、春日、それに社寺曼荼羅も加はつて色調の美を潤ほはし、展觀を一段と賑はしめた。なほ、三社託宣や賀茂大明神託宣、慈悲萬行菩薩なる春日神號をも數へられた。

これら神號神像は特に新調の裝置に納められ、また貴賓室の壁面に掲げられて、觀者をして見學の間に自ら襟を正して敬虔の念を起さしめ得たのは床しかつた。

第二部　神典並註解書。先づ御巫淸白氏藏本古事記上卷は應永三十三年春瑜書寫のもの、かの有名な國寶眞福寺本(應安本)に次ぐ伊勢一本とも應永本とも呼ばれて學界に珍とされるもの、重要美術品に屬する。神宮文庫藏本古事記裏書亦應永三十一年道祥書寫、古事記注釋書として現存最古のもの、重んずべきである。次に、日本書紀は、國寶級に向神社所藏第二卷一册延喜四年といふ古寫本及び北野神社所藏二十八册平安中末期から室町時代に亙つての書寫本に兼永自筆本を以て補ふたもの、それと並んで重要美術品たる熱田神宮宮應藏本十五卷永和三年奉納寄進狀一卷添付のもの、相俟つて共に稀世の重寶揃である。續いて永正、明應、天文書寫の神代卷なども列なつて好學家の注視を聚めた。なほ、龍尙舍自筆本(神宮皇學館藏)も添へられた。書紀注釋書として第一に擧ぐべきものに、御巫氏所藏日本書紀私記がある。これ亦重要美術品、應永三十五年髮長吉叟(出家して道祥といふ)書寫に係り、現存私記中最古の寫本。それと共に神宮文庫所藏弘仁私記も亦室町初期のものと見られる。纂疏には大永の建仁寺兩足院本、弘治の神宮文庫本、淸源家本(猪熊信男氏藏)などが並ぶ。文龜、永祿書寫の日本紀聞書(高野山藏)も珍らしい。其他、書紀全部の註釋書として學者の注目に値する谷川士淸自筆稿本日本書紀通證二十三册及び河村秀根自筆書紀集解稿本三十六册も積まれた。なほ、近衞家、菊亭家寄託の書紀寫本、奥州白河城主松平忠次奉納神宮文庫藏古語拾遺も出された。

延喜式及神名帳類では延喜式神名帳の天文鈔本(鈴鹿三七氏藏、精長延佳等傍注書入本(御巫氏藏)の外に、國内神名帳の例として密藏院所藏尾張國内神名帳(明應三年寫)並に猿投神社所藏三河國内神明帳(慶安二年寫)各一卷が見られ、毛色の異つた若宮八幡宮所藏諸國神名書(嘉元本の明應轉寫のもの)、又は東大寺戒壇院公用神明帳(文明鈔本)及び觀心寺恒例修正月勸請帳(天文書寫)並に修二會神名帳(兜師明俊題)、或は御厨觀音寺神名帳、今井山觀音寺神名帳(御巫淸直新寫)が揃へられ、異樣神名の行列として、とり〴〵に見どころがある。大祓詞では、數種の中臣祓詞例へば大永三年宣賢書寫本、天文五年兼右筆假名書本、慶長と元和の梵舜自筆本、又は惟足筆寫本など供覽。註解物に信景自筆祝詞管豹鈔、爲起著神名式比保古、其他儀式帳解などが得られた。別に、若狹彦神社所藏詔戸次第一卷は乾元二年の奥書あつて比類稀なもの。其外、舊事本紀寫本や神祇史料たる國史神祇集(大阪府立圖書館藏本)續國史神祇集(舊三上本、神宮文庫藏)も加はつた。

以上諸資料陳列に第一室、第二室一部、第三室一部が當てられた。

第三部　以下神道史資料の蒐陳である。

伊勢神道關係のものは、主に神宮文庫藏本を以て第二室が充たされ、鎌倉、室町、江戸と時代別に配列された。所謂神宮祕書十二卷の内五部書は度會神道の源泉たるもの。この神宮文庫本は南北朝時代の古寫、優に眞福寺本の上に位する。尊重すべきものたるは言ふを俟たない。その中二所皇太神御鎭座傳記(太田命訓傳)一卷は紙背に建武二年註進狀などが藏されてゐる。又、同御鎭座次第記一卷あり。豐受皇太神御鎭座本記は延文元年度會實相の書寫。(なほ宮地博士所藏林鵞峰舊藏本も出た。但、倭姫世記は江戸時代轉寫のものを以て塡補した)又、神宮文庫藏本の神名祕書には貞和二年の奥書がある。古老口實抄(京都府立圖書館本)は永正三年の書寫に係る。

さて又神宮文庫本の類聚神祇本源は亦眞福寺本の上座に居り、現存最古の寫本とされる。その中、第五内宮御遷座篇、第六外宮御遷座篇は共に正平八年の書寫。第十内宮別宮篇には正平七年書寫、實相の名が知られ、第十一外宮別宮篇の奥書は見えないが、第三禁誡篇のは貞治六年、通俊詮改の名があり、第十四神鏡篇の奥書に北島入道借覽のことが記され、第十五神道玄義篇に正平八年繼橋卿吹上村にて實相書寫のことが判かり、その紙背文書に德治の年號が挿まつてゐる。著者家行世を去つてまだ程遠からぬ間の書寫本として、これに由つて家行親房兩者の思想上の連繫も明かとなる。又、家行の瑚璉集神祇祕抄をも見ることが出來た。

次に舊事紀玄義の觀應二年寫本(菊亭家藏)、豐葦原神風和記中下册の應永十三年寫本(高野山藏)とその室町時代書寫本(神宮文庫藏)が並び、元々集、東家祕傳の寫本も列る。神懷錄は蓋し猶考ふべきものゝ一つであらう。更に、檜垣常昌の神道思想を窺はしめる太神宮兩宮之御事といふ永享八年書寫一卷は、仙宮祕文一卷と共に三重仙宮神社加藤一馬氏の家に寶藏されたもの、よく南朝との連結を想はしめるに足る。

中世の度會神道の流より出た江戸時代の度會神道は出口延佳によつて代表される。その自筆神宮續祕傳問答が出陳され、又その自筆神儒佛說は神宮文庫と北野神社とに珍藏されて二樣同文であるのも興味をそゝる。外に延佳の闇齋あて書狀やその著書、並にその門流の久志本常彰、喜早清在、眞野時綱等のものも展べられた。

第四部　吉田神道。第三室に收めらる。畫像に兼俱(模本、鈴鹿三七氏藏)や兼從(惟足書、田中俊清氏藏)のがある。宗家には永正十七年十一月宗源神宣の一例(滋賀押立神社藏)、唯一宗源行事兼永申狀寫の外に、中臣祓抄(大永抄本)、三元神道三妙加持經(享祿寫)、名法要集(弘治寫)、神道深祕傳(永祿寫)など代表的の著述が擧げられ、門流には惟足の講說、聞書や書狀、又安休の書狀が出された。

第五部　伯家、安家、忌部神道。第三室。神祇伯家のものは松尾神社、西宮神社、吉井氏よりの出品、大永、弘治の白川家の御敎書、宮內省圖書寮本伯家口決、本學圖書館本伯家學則を主とした。

安倍神道にては宮內省圖書寮所藏天曹地府祭祭典圖は絹本着色珍稀尙ぶべく、若杉保定氏の家に傳はつた陰陽寮條坊圖と相俟ち、文肝抄、天曹地府祭勤行御使備忘の記事と併せ、土御門神道の行事をこれによつて窺知し得る好資料である。中和門院及び家康の御祈狀は黃麻紙上に泰山府君祭、また天曹地府祭の朱書の祭文中墨書の署名があつて珍らしく、晴明像と共にすべてこれ陰陽道信仰の所產と謂ひ得る。又、談山神社所藏幸德井家文書、並に宮地博士所藏安倍神道傳授書も參考に値する。

忌部神道は神代口訣や色弗口訣がこれを代表した。

第六部　儒家神道。儒學者流をこれ亦羅山畫像(今江令太郎氏藏)、三輪物語寫本の出品を以て代表させた。

垂加流は下御靈社出雲路迪次郎氏の藏品で多く占められた。卽ち九條尙實筆垂加靈神號、標中納言實德題書闇齋畫像に風水草、風葉集、垂加あて門人誓文、就中正親町公迪の書狀と口授傳書、友松氏興畫像、出雲路民部あて玄節書狀、泰山の顯士傳それに祐之自筆中臣祓和解、玄達題詞、稻荷神社所藏味酒講記、葦水草、松岡叢書一部(本學圖書館藏)などが加へられ、正英の原根錄、玉籤集の外、その橋家神道傳授に幸和を與へた口傳書(名古屋圖書館藏)又は士淸に與へた神道許狀は正英自筆として尤も信憑されうるもの、其他垂加門流なる復齋の稿本、强齋の畫像、龍雷圖並傳(阿刀氏藏)直條入門日記も附隨した。

垂加學に出でて一流を成し、國學への道程の橋渡しと成つた吉見谷川等諸家關係の出品は第四室に配置された。信景自筆傳書、秀根自寫本と共に、吉見一家の稿本類は多く名古屋圖書館の蒐藏に係り、就中中臣祓私辨、崇道盡敬皇帝一流神道は幸和の自筆本、また神學初會記五部書說辨、增益辨卜鈔俗解、神學辨僞正續などの大部の書籍は門流の筆寫に成る。蓋し幸和研究の好材料ともならう。其他、谷川氏の畫像は門生の畫いたもの、士淸自筆の寫本も陳列さるを得た。

第七部　國學神道。これわが惟神道の本流と稱へて大いにその

面目を發揮させたもの。亦第四室を占めて淸新の氣この裡に漂る。こゝには請創造倭學校啓草稿並に謹請蒙鴻創造國學校啓、また春滿自筆神號訓釋傳（羽倉信眞氏藏）、眞淵が宣長に與へた手翰（竹內文平氏藏）と春滿眞淵畫像とが宣長以前のものとして揭げられ、宣長以後の部類に宣長が經雅に與へた自筆儀式解序（神宮文庫藏）と門生橋本稻彥に贈つて道を唱へた和歌（竹內文平氏）藏、これに大平筆三大考論說、弘訓書神國和歌、信友筆稿八幡考、篤胤自筆御卽位圖題歌、又は門人河內盛雅菅原道九筆寫古道大意（靖谷文庫藏）、是香書入符箋ある古史成文並びにその自筆稿本と畫像（六人部克己氏藏）が列つた。上の春滿眞淵の畫像にこの宣長篤胤のを併せた四幅對は、所謂國學四大人肖像として、何れも絹本着色風丰眞に逼つて躍如たり、現に稻荷神社の保藏するところ、嘗て上田萬年博士が奉納したものといふ。これに大平、盤嶺の識語一卷を添ふ。別に又、國史研究室所藏紙本墨書の宣長肖像あり、春庭の模寫に成る。

其他、富士谷一家の學統を傳ふる御杖の神典奧呂寫本、且は南里有鄰自筆日本紀神代訓義（圖書寮藏）は別に各々その特色を見せた。

第八部　佛家神道。第五室に異彩を放つ。兩部神道には大神神社藏品に三輪流を知らしめ、寵氣記の應永本（高野山藏）と享祿本（京都府立圖書館藏）、御流傳書の灌頂や印信に關する高野山本に異奇の目を張らしめるものが多く、應永書寫金剛山神祇卷、永享書寫神祇祕抄等それ〴〵見るべきものがある。他に、兩部神書（菊亭家藏）、朝熊山儀規（龍谷大學圖書館藏）も稀有に屬するものであらう。山王神道には叡山文庫壽量院のものが多くを占め、彩色圖ある日吉山王利生記や山門流神道永正印信集又は山王一實神道原（猪熊信男氏藏）が見出された。法華神道としては稻荷神社境內出土の三十番神經筒が目立つが、こは永正十八年の刻銘を以て稻荷大明神御寶前に奉納の由を明かにする、經典八卷も添はる。外に明應書寫番神問答も見受けられた。其他、安居院作神道集に神宮文庫出品中外題神道書とあるものもあつた。なほ又眞宗關係神道書諸神本懷集は足利末の書寫本三通りほど並んだ。慈雲自筆書類は高貴寺藏品に係るものゝみであつた。

佛家關係雜部に收集された伊勢流灌頂、賀茂神道護摩、東大寺圖書館及金剛三昧院所藏八幡大菩薩關係のもの、或は八幡春日託宣、其他正中、應永、文明、天正の古寫本類に八幡神信仰其他に就いてなほ考究すべきものあるを示した。

第九部　雜部。第五室。貞治、應永、永正、天文、慶長と諸種ある記錄文書中に、天文永祿間の御湯祝詞（香具波志神社藏）も面白く、これに引き替へて新らしい梅辻規淸の畫像や烏傳神道書、その他日本書紀下御靈版、中臣祓の版木、三千番神像や菅神像又は國學四大人肖像などの版木類が出陳されて亦興味を添へた。

叙上、開展三日、來觀者日一日と多きを加へて急刷の目錄も忽ち拂底したほどの盛況を呈し、東西遠來の好學者相ひ混じつた。この展觀が準備を急がれて疎雜に走つた點もあつた嫌は免れ難いが、多少筋道を立て、稀覯未知の藏品や古寫本乃至自筆稿本等を可なりに多數蒐集し得たことによつて、斯種研究に幾分とも新し

い刺戟と興趣を與へ、尠からず諸方の視聽をも喚起し得たことを想うて多數出陳者に深謝し筆を擱きたい。

（昭和十一年十二月十日、加藤竹男記）

○京都帝國大學國史專攻學生北九州・山陰地方研究旅行記

例年秋季運動週間を利用して行はれる本旅行の今年度計畫は北九州・山陰地方と決定した。準備成つて、

第一日（十月十一日）　船中

午前九時半、京都から大阪から各自神戸三宮驛に集合、團タクに分乘して一路波止場へ。秋深い朝光に包まれた港内メリケン波止場の長崎丸へ乘込む。總員十九名（外に途中參加者四名）、先輩の御見送を受け午前十一時奏樂裡に出帆、船客中には中國の男女や白系露人の顏も多く混るを見れば、むしろ上海迄足をのばしてみたい氣がする。晴れ渡つた摩耶の山々の下に横はる川崎造船所のクレーンの巨大な骨骸が、船の進行と共に大きく轉回してやがて遠ざかると、そこには長閑な内海の風光が展開する。小豆島をそれと見てやがて日沒時に來島の瀨戸を渡るまで、今更のやうに日本の國の美しさに心を奉はれた一行は、夜と共に波靜かな船中の第一夜の眠りに入る。船員に聞けば玄海灘も異狀なし。

第二日（十月十二日）　圖書館、春德寺、シーボルト宅址、崇福寺、大浦天主堂、出島。

税關吏の荷物點檢に目を覺されるともう平戸も廻つて船は南へと走る。午前十時長崎入港。今度は左手に東洋最初で最大の三菱造船所が先づ吾々を迎へる。出島岸壁に上陸、長崎の第一印象は卒直に云つて薄汚ない。長い歷史の埃に蔽はれた汚れかもしれぬと思ふ。而も思ひなしかその汚さの下からエキゾチックな美しさが恥しげに覗いてゐる。

福屋旅館に旅裝を解けば直ちに見學の强行だ。京大クラブ長崎支部中村氏の御案内を乞ひ得て先づ縣立圖書館へ。圖書館こそは吾々にとつて汎ゆる見學への導きの絲である。館長增田氏の御好意により史料陳列室を開放していたゞき御説明を得た。――主なものに現存長崎最古の地圖（出島峻成當時のもの）の寫、シーボルト「出島圖」、ゼスイット宣教關係諸史料寫眞版、「奉行所文書」、切支丹諸史料、就中「邪宗者ころび宗旨改帳」（德川時代）、異宗徒調帳（明治元）元和八年及寛永十五年「内外教徒處刑圖」の寫眞、其他信徒の遺した聖像・メタル・クルス等の記念物等あり、貿易關係では義久「朱印狀」、支那貿易船への信牌、「和蘭條約」原文（Tractant）、數多の「割符留帳」、洋學關係のものでも「ヅーフ・ハルマ蘭和辭書」を始め貴重なものが多い。だが西・葡・蘭語を解さぬ我々には、それ等も充分な面目を發揮し得ないのを遺憾とした。「奉行所日記」が文化頃より悉く收められてあつたのは特筆すべく文嬉しいことであつた。短時間の餘裕しかない見學にも不拘是等すべての死せる史料は、かつて封建的治者がそのよつて立つ社會の秩序と存續のために如何なる政治を以て臨んでゐたかを、まざ〳〵と吾々の腦裡に具現化してくれるには充分であつた。挨拶を濟して圖書館を辭する一行の頭には既に長崎見學の心構へが出來上つてゐる。

切支丹、外國貿易、洋學、――この三つの斷層が長い鎖國冬眠期を通じて日本人の唯一の眼たり耳たるものとしてあつたこの長崎が、日本歴史の中に占める特異なる地位を確保するのだと。晝餐には京大クラブ長崎支部諸兄の御厚情に甘えて、共和園で支那料理の御馳走にあづかる。空腹を充して尙相次ぐ皿盛りに一同その健啖も遂に及ばず。茲に記して支部諸兄に厚く御禮申上げる。

午後は自動車で市内史蹟廻り。先づ臨濟禪寺華嚴山春德寺へ。此地一帶はもと長崎甚左衞門居城の跡、かつて佛寺であつたのを永祿一〇―一二年に切支丹支配の下にトドス・サントス寺がおかれ當時の天主教總本山としてあつたが（天正五年來長崎の地は大村家軍資龍通の抵當としてゼスイット教會の手に渡り爾來十餘年切支丹領となつてゐた）、後寛永年間に德川幕府の排耶政策下に佛教徒の手に奪還され現今の春德寺となつたといふ。この歴史はその他多くの長崎の古社寺が有つた同樣の歴史の一典型とも考へられる。境内には芭蕉翁發句塚（時雨塚）等の句碑が立つてゐた。その山門を出て山沿ひ僅かでシーボルト宅址へたどりつき、科學としての日本醫學・洋學の父たる先生に學徒としての敬意を表する。碑上に繁る樹葉には微かな紅葉が差してゐた。再び石段下に待たせた自動車に分乘して黄檗の名刹崇福寺へ。石段を登りつめた上に、壁を薄桃色に塗る山門は、一寸少年時代の空想の龍宮城にも似よう。鐘鼓樓・護法堂・大雄寶堂（本堂）と順次に見て廻る。すべて國寶指定。寛永六年の創建と云ひ、諸堂の構造配置の模樣は吾々の眼に親しい宇治萬福寺によく似てゐる。本堂内兩側に据置かれた十八阿羅漢の怒迫する諸像の印象も宇治で見慣れたものがある。一行中のカメラ黨が活躍する。境内に存する大釜は、天和二年飢饉の際に時の住職千呆禪師が、一山の衆僧を率ゐて飢民のために粥を炊いたと稱するもの。此地は高臺で、起伏の多い長崎の港町の甍々が、秋深い午後のあたゝかい陽差を浴びてのどかに見渡される。――次いで日本最古の天主堂たる大浦天主堂へ。高い石段の眞上中央に「慶應元年三月十七日日本之聖女信徒發見記念」と銘した聖母像が吾々を迎へる。その年「子育觀音」と呼ばれたマリア像の手引によつて、穩れた信徒が發見されたことを記念したのださうだ。そこには吾々の見慣れた佛寺の樣式とは全く打つて變つた純粹なゴチック建築の尖塔が空高く聳え、その前に立つ者に或る清新な感情を呼び起こさす。その同じ魅力が吾々に數倍する力を以て、吾々の三百年前の祖先・信徒等を捉へなかつたとだれが云へよう。この建物はかの慶長元年長崎西坂における「二十六聖人殉教」を記念して、その處刑の地に對して建てられたものといふ。堂内には「二十六聖人處刑の油繪」がある。堂内の高い色ガラスには夕陽が照り映えて旅の第一日が昏れてゆく。宿所への途次、車をとゞめて「出島蘭館址」を訪れて、出島の地勢、商館倉庫の殘存等を見學した。

夕食を濟せばはじめて各自自由の時間だ。長崎には小徑が多い。それは異國的な月光の下に蒼然として多路多岐である。

第三日（十月十三日）本蓮寺、浦上天主堂、福濟寺、諏訪神社、雲仙。

研究の旅は忙だしい。朝食を急がせて又直ちに自動車に乘込み市内見學に巡る。本蓮寺は聖ジヤン・パプテスタ寺の舊蹟である。慶長十九年幕府の禁教令によつて大村頼純の下に破壞せられ佛寺とされたが、又切支丹宗徒のために燒拂はれたのを、元和元年熊本妙本寺開基日眞の徒弟日慧來つて「破邪顯正の獅子吼」を試み漸次宗風をあらはし、一時は十萬石の格式を有し九州における禁教彈壓の根本であつたといふ。其處を去つて郊外の浦上天主堂に赴く。自動車は阪道を曲折してやがて東洋最大のゴチック教會堂の玄關に登りつく。大浦のそれに較べて新しいが遙かに宏大だ。山上の建物全體が十字架形に設計されてある。宏壯な天井を仰げば一梁毎にその中央に、歌・十・祈・謙・忍・貧・從・貞・敬神・信聖・愛の文字が記されてキリスト教の本質を告げてゐる。この會堂の敷地は、もと禁教に之れ努めた庄屋高谷家の舊宅阯であつたと聞いて、皮肉にも亦意義深いものを考へさせられる。この教會は現今尙一萬餘の信徒を擁してゐるといひ、日曜日の朝には信徒である女中さん達も主家を放擲して禮拜に集ると聞いては、微笑ましくもまた歎く向もあらうといふものだ。寶物室には善長谷信者の天井裏古行李中より出たといふ前出于育觀音（マリア）が數多く陳列されて、一行の注意をひく。次は福濟寺。國寶指定の山門の礎石を過れば純唐風に造られた朱粉塗の支那寺が現れる。寛永年間の開基で黄檗山萬福寺直末の別格中本山。支那商人の歸依厚きものがあるといふ。境内の大燈籠の傍に立てば長崎港は眼下に一望される。往昔、彼方の岬を廻つて入港する貿易船はこの燈籠を目標として望んだものときく。昨日見物の崇福寺も亦、唐船海上安穩祈願の道場として建てられたことゝ思ひあはされるものがある。——はや午に近い。行く處すべて急坂と石段だ。一同こはゞつた脚を引ずつて又しても諏訪神社の石段を登る。社務所宮司の方の雄辯を拜聽しながら些か驚かされたことに、この社も亦かつてゼスイット教徒の手に燒拂はれ、寛永年間に至つて時の治者の排耶政策によつて神社として再興せられようとするも、尙一般人民の中に强く根を張つた切支丹歸依は容易に拔くべからず、神社建營にかり集められた職人達は材木供給をボイコットし更に社成るも參詣する者無き狀態であつたといふことだ。同じ宮司は結論せられた。——長崎に現存する社寺は悉くといつてもいゝ程、皆切支丹宗に對する反動政策として創建されたとみることによつてのみ、その起源を正當に理解することが出來るのであります、と。今尙祭日に爆竹・花火を用ふる習俗は、氏によればやはり切支丹に對する神佛の反動政策の餘習である。傾聽する間に時間がきりつまつて來たので急遽社を辭して走り降る。

午後は一路島原半島、雲仙へのスピード行進の段となつた。時は秋・處は雲仙國立公園、紺碧の海原をうつとりとして送り迎へながら疾走するドライブの快味は、日頃研究に追はれ勝ちな吾々の生活にとつてまた望み難い一時であらう。

夕刻雲仙ホテルに到着。霧が襲ふ。うすら寒い。夕食迄の時間を溫泉めぐりに利用する。暮れかゝる途を里餘を隔てたゴルフ場迄、ドテラに下駄でハイクする。思出深い一日であつた。（小野義彥記）

第四日（十月十四日）　原城址、元山家

早朝起床。快晴。今朝事故者數名を出した。硫黄泉中毒による腹痛らしい。午前七時半先輩浦上氏の御案内でホテル出發。プロローグの二里許りは、國立公園溫泉岳の紅葉しはじめた樹々の下の、完備したドライヴウエイの上を時速四〇哩で走り下り、島原半島にさしかゝると、山々は遥か後方に退き、新に眞青に澄切つた海が左方にその姿を現はした。

午前十一時原城址に到着、南有馬小學校訓導の方の說明で城址を一巡する。城址へ通ずる路は二本の狹路のみであり、後方は絕壁で海をひかえ、此の城が如何に堅固なものであつたかを思はしめる。「新玉の年の始めに散る花の名のみ殘らば魁と知れ」との辭世の句を殘して、壯烈なる戰死を遂げた幕軍の將板倉內膳正重昌の碑に敬意を表し、中ノ手門址を通つて空濠に至る。濠の一部を圍つて窪地にしその中に女子供を避難せしめたが、幕軍が彼等を皆殺しにし、ために翌日より一層の激戰となつたとの話を聞き、自己の信念のために殉じた人々の心情を思ひ暗然とした。次いで「ホネガミ地藏」に詣でて戰の犧牲となつた幼なき子供達の冥福を祈つた。更に少し離れた海岸に沿つた八幡宮境內にある、慶安元年代官鈴木重成が建てた供養碑を見て、南有馬小學校に至る。こゝで茶の饗應をうけ休憩。その間に原城の模型や島原亂に關する參考資料を參觀し自動車で更に南下した。

加津佐町鄕土史家元山氏は多方面に亘る蒐集を以て聞えてゐる。其等の中、貴重なる島原亂に關する幾多の資料の目錄をとつた。三十餘通、その殆どが、長岡監物同佐渡宛書狀で、戰況の報告、陣中、合戰の心得等を記載し當時の事情を活寫せるものである。此事はこの旅行の豫定外の收穫であつた。然し先を急ぐ我々として何分時間がなく充分記錄をとれなかつた恨みを殘しつゝ、晝食を諫早まで我慢して自動車を急がす。午後二時漸く諫早に到着、わづかの時間を利用して茶店で晝食をとる。

此處で浦上氏は島原へ歸られた。二時二十五分諫早發車、午後七時二日市着。九大圖書館田中氏の出迎をうけ延壽館に投宿。夕食後入湯。充分旅の疲れを休めることが出來た。

第五日（十月十五日）　水城址、觀世音寺、都府樓址、太宰府神社、菅崎八幡宮。

切詰められた旅程のために午前六時半起床。さわやかな朝の光を身に受け、自動車に分乘して今日の見學箇所水城址に向ふ。朝靄の立ちこめた邊の景色は、暫し我等を呆然たらしめた。西田先生の御說明をうける。こゝ水城址は、御笠川によつて東西二堤に分たれ、東堤約三百二十米、西堤約七〇〇米、高さ一四米ある。天智天皇三年の工築にかゝり、堤の內部に水を貯へて外敵防備に備へ、太宰府の防禦としたが、藤原末期には既に廢墟となつたものである。

時間の都合上、此處を簡單にすませて次の觀世音寺に急ぐ。現存せるこゝの堂宇はすべて江戸時代の再建にかゝり、何等往時を偲ぶべきものはないが、その本堂と阿彌陀堂に安置された多數の佛像は、藤原或は鎌倉時代のもので、西田先生の御懇切なる御說

明により我々は往時の藝術を充分觀賞研究することが出來た。

更に我々は都府樓址へ進む。正廳址に至る二町許りの往還の左右に、東廳址並びに西廳址が存し、前者は九箇、後者は八箇の礎石が殘存してゐる。正廳址は一段高くなつてをり、三十六箇の礎石が整然として存してゐる。こゝで記念撮影をして更に太宰府神社に向ふ。

太宰府神社では時間がますゝ切迫してきたので走る樣にして參拜する。然し、寶物も一巡して後は馳足で自動車に乘り二日市驛に急行。やつと汽車に間に合つて一同ほつとした。十時半博多驛着。田中氏の御案内で先づ岩田屋デパートに行き屋上より福岡市を俯瞰し、ゆつくり見物する時間を持たない我々は、それによつて福岡についての地理的概念を把握することが出來た。こゝで晝食をすまし、一時間程の休憩時間を利用して、博多人形其他の土產物を仕入れる人々もあつた。

市電にて筥崎宮に至り、寶物殿を拜觀する。秀吉其他の諸將の寄進狀等の重要な古文書が多くあつた。

此處で九大の方々と別れを惜しみつゝ吾々は更に萩市へと急ぐ。午後三時十分門司着連、絡船の人となる。本土と九州の中間に立ち四日間の九州旅行を顧み、我々には得る所多く、その收獲は今後の我々の勉學の上に必ず何等の形で表はさねばならぬとの感を強くした。

四時十分下關發。いよゝ山陰路に入ると、霧圍氣に一時世後れたものを感じ山陰の名も肯ひやすい。併し、日本海に沈む大きな眞赤な太陽、紅色に染まつた美しい空、夕闇迫つた中にそゝり立つ雄姿をあらはせる山々は強く印象に殘る。七時萩着。日は全く暮れて、暗い電燈がちらつく町の中をバスで富田屋旅館に着、夕食後この旅行最初のテイパーテイを諸先生と共に開いた。

〔越川正啓記〕

第六日（八月十六日）　松蔭神社、松下村塾、伊藤博文舊宅、東光寺反射爐址、萩城、南明寺、萬福寺、醫光寺、染羽天石勝神社。

幕末明治維新史研究上において萩の有つ意義には他に比類しがたきものがある。切り詰めた旅程の中より、三時間半を割いて、自動車による名所舊蹟の巡歷を試みた。

まづ松蔭神社に參詣の後、境内にある松下松塾を訪ねる。塾は在りしまゝの簡素なる姿をもつて人をして肅然として襟を正さしめ、直近くには幽囚されし舊宅が並び立つて彼の苦難の不撓の精神を偲ばせる。尙神社附屬の寶物館があり、松蔭關係の史料を藏してゐる。

伊藤博文舊宅　伊藤博文が安政元年より明治元年までの住宅、小身武士の家作の一型であるが、その年少時における美談がすでに傳說化されてゐるのも興味ぶかい。

東光寺　毛利家五代の菩提所、森嚴の氣溢つる幽地であり、その前庭には元治甲子の殉難者、益田右衞門介等列士の墓が立ち並んでその精神を今日に傳へてゐる。

反射爐は丘の上に昔のまゝの形を殘し、幕末工業史上に忘れる

事の出來ぬものとして注意すべきであらう。

萩城は今は僅に天守閣以下の殘礎と城壁を殘すのみであるが、址内にある花江の茶亭は嘗ては毛利の別館花江邸内にあり、開港攘夷の論高かつた頃從臣佐幕朝廷兩派に分れ事重大なる時に當り、敬親公は私に此の茶亭に股肱の臣と會談し國事を懇談して勤王奔走の密議をこらされた名殘りのものである。

春は糸櫻咲き亂れ沖の白帆もなつかしき南郊の南明寺、その觀音堂には本尊觀音立像及び千手觀音立像(共に國寶)を安置し、佛燈煌々と無明の暗を昭して海上順風安全の守護とまします。あわたゞしい時間中に斯うした名所の數々を驅け廻り、十一時には石見益田行の汽車に身を托した。

萬福寺は雪舟の築造と傳へる優れた庭園を以て世に聞ゆるところ、山陰の地に斯く嘆賞すべき名園を築き、今日にまで傳はるゝは特記すべきである。本堂は近年まで入母屋作であつたのを、修補の時復原して四注の美しい屋根をもつてゐる。寶物としては國寶の二河白道圖、藤原末期の素朴なる多聞天、持國天の像や、鎌倉末期の本尊など、僻地に珍らしく保存されてゐる。

醫光寺にも傳雪舟築造の庭園を傳へ、萬福寺の石を主とせるに對し、此庭は刈込物を配してゐるが共にその精神において相通ふものを感ぜしめる。

染羽天石勝神社　本殿(國寶)は天正十一年の建立に係り、流造、棧瓦葺であるが屋根の反り優雅纖細で、もと瓦葺ではない事を思はせる。

長途の旅の疲れも漸く出て來た樣である。此日は溫泉津まで辿り着いてゆつくりと寛ぐ事となつた。

第七日(十月十七日)　鰐淵寺、出雲大社。

旅行も殘り二日となつた。今日のコースは雲州鰐淵寺と出雲大社と、共に由緒ある古代文化の中心である。

鰐淵寺の起源は古く、その傳說は既に有名である。數ある寶物中推古式金銅觀世音菩薩二軀(國寶)と毛利元就畫像(國寶)とは最も顯著なるものであり、又文書を多く所藏するが、其中元弘二年後醍醐天皇御願文(國寶)及び名和長年の執達狀(國寶)は古文書中にも特に珍藏されてゐるものとして、一同深き興味をもつて見學した。鐘樓には、壽永三年の銘ある鐘があるが、銘文によりもと櫻山大日寺のものであつた事を知る。

出雲大社はその莊重なる大社造本殿を以て有名であるが、更にその寶物館には建武中興の貴重なる史料の數々を以て飾られてゐる。殊に、綸旨二通(王道再興の事、寶劍代の事)が並べ陳列されてあるのは研究上種々有益なものがあつた。

第八日(十月十八日)　清水寺、大山寺。

八時半松江驛を出發、安來に下車し、清水寺に赴いた。本寺も鰐淵寺と並んで推古天皇の御代の草創に係り、勅願寺として尊崇深きものであつた。永祿天正の間兵火のため多くは灰燼に歸したが、尙内院を初め佛像その他の寶物には見る可きものも多い。國寶として、十一面觀音像、阿彌陀如來、兩脇士像があるが、特に後者の脇士の正坐せる姿が、洛北三千院のそれよりもなほ、腰を

落つけた純和風のものであることに興味が繫がる。

清水寺より米子を經て伯耆大山寺に詣でた。出發以來天候に惠まれた一行も最後の一日に於て急に時雨日和となり、大山寺に着いた頃は、そぼ降る時雨に加へ大山の氣候は殊に寒い。一つの傘に二三人も頭を突込み大急ぎに阿彌陀堂にかけ込んだ。古杉枝を交へ、時雨に冷ゆる中に古さびた單層四注造の建物は、旅の最後の印象として深くも腦裡に刻みつけられる。堂內阿彌陀如來及兩脇侍像の偉容を仰ぐとき、古き人々の心とも直接通ふであらう。本堂は今修理中のため、傍に設けられた板葺の中に本尊以下を奉齋してゐる。銅像觀世音菩薩立像四軀は御厨子と共に推古及び白鳳の作として國寶に指定されて居る物であるが、何時々々までも立去り難い四周の情景であり、莊嚴にも勝れたる御佛像である。また國寶の厨子附屬の鐵板三枚に鑄出せる祈願文の判讀にも、貴重な多くの時を費した。

大山の秋は、深い靄を伴つて夕闇は迫つて來る。一行は名殘を惜しみつゝ下山の途に就いた。米子の驛に着いた頃はもう午後六時に近かつたであらう。十日間の長途の旅を無事修了した事を互に喜びつゝ、一行歸洛の途についた。

◆

末筆ながら十日間に亙る旅行中、各地に於て種々と御歡待下さつた京大クラブ支部の先輩諸氏、並に、幾多の貴重なる圖書や寶物以下の拜觀を許容せられた圖書館、各神社、佛閣に對して厚く感謝の意を表する次第である。（八木茂美記）

會報

○評議員改選

昭和十一年度大會（十一月二十一日）に於て會則により評議員の改選投票を行ひ、その結果石橋評議員に代りて、梅原末治氏評議員に當選。他の評議員は全部留任と決定。

○會員動靜

入會

京都市左京區田中飛鳥井町九　黑川時雄方　羽田秀典氏
京都市左京區北白川小倉町　竹內史朗氏

轉居

京都市左京區川端東丸太町上ル東入　荒尾方　藤枝溫良氏
京城府蓮建町一三二　有光教一氏
東京市本郷區駒込富士前五　鳥羽正雄氏
京都市上京區朝日通寺町東　岩崎方　木越宏氏
神奈川縣鎌倉町扇谷字泉谷　（舊姓橋村）川副博氏
東京市世田谷區北澤四丁目三二八　宮地直一氏
京都市左京區北白川伊織町四五　鈴木成高氏

退會

下村三四吉氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄

武藤長藏著 日英交通小史(英文)	著	史淵	十四
竹島寛著 王朝時代皇室史の研究	小島鉦作氏	臺大文學	一ノ五
帝室博物館年報(昭和十年)	東京帝室博物館	青丘學叢	二十四
瀨野馬熊遺稿	瀨野いと氏	南方土俗	四ノ二
史學科研究年報 第三輯	著者	國民精神文化	二ノ二
渡邊幾治郎著 明治史講話	臺北帝大文政學部	民族學研究	二ノ四
陳嘯江著 三國經濟史	著者	以可留我	一ノ二、三
		皇學	四ノ三
		日本文化	八

史學雜誌	四十七ノ十、十一、十二	東大史學會	東洋史研究 二ノ一
歷史地理	六十八ノ四、五、六	日本歷史地理學會	歷史學研究 十ノ六
社會經濟史學	六ノ六、七、八	社會經濟史學會	商業と經濟 十七ノ一
史學研究	八ノ二	廣島史學研究會	哲學研究 二十一ノ一-十一
史潮	六ノ三	大塚史學會	善隣協會調査月報 五三、五四、五五
人類學雜誌	五一ノ十、十一	東京人類學會	國立北平圖書館々刊 十ノ一、二、三
考古學雜誌	二十六ノ十、十一	考古學會	中國文學月報
文化	三ノ十、十一	東北帝大文科會	史學消息
國學院雜誌	四二ノ十、十一、十二	國學院大學	Nankai Social & Economic Quarterly. 九ノ二、三
史蹟と美術	七ノ十一、十二、十三	史蹟・美術同攷會	天津南開大學經濟研究所
經濟論叢	四十三ノ四、五、六	京大經濟學會	Harvard Journal of Asiatic Studies 一ノ二
社會學徒	十ノ十、十一、十二	社會學徒社	Harvard Yenching Institute
鄕土研究信濃	五ノ十、十一	信濃鄕土研究會	
史學	十五ノ三	三田史學會	

九大史學會	國民精神文化研究所	北平燕大歷史學系
臺大短歌會	日本民族學會	
青丘學會	鵠 故鄕舍	
南方土俗學會	神宮皇學館々友會	
	天理圖書館	
	京大東洋史研究會	
	歷史學研究會	
	長崎高等商業學校	
	京都哲學會	
	善隣協會	
	北平圖書館	